岡本かの子全集

第七巻

岡本かの子全集

第七巻

TARO

冬樹社

TARO

岡本かの子全集　第七卷
昭和五〇年六月三〇日初版第一刷發行

著　者　岡本かの子
發行者　高橋直良
發行所　冬樹社
東京都千代田區神田神保町二—一八
電話東京二六四—〇三四六
振替東京七七五七
印刷所　株式會社太洋社
製本所　有限會社三和製本所
製函所　株式會社光陽紙器製作所
本文用紙抄造　王子製紙春日井工場
表紙用クロス　日本クロス株式會社
裝　畫　岡本太郎
裝　幀　栃折久美子

0391-01507-5190 ©TARŌ OKAMOTO 1975　検印省略

第七卷　目次

女體開顯……三
解題・校訂……三九一

小

說

7

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

女體開顯

背中に濠の溜り水のぬるい濕氣を感じながら、前には一面、黄いろく乾いて靜な焰のやうに搖れてゐる夏草の原を控え、奈々子は暫らく崩れ土の上に立つてゐた。胸に採り溜めた甘く泥臭い菱の實を兩手で一ぱい抱えてゐる。

明治三十年頃に三菱ヶ原と呼ばれるこの野原は、年々人口が稠密になつて行く大都會の眞中に在つて、地價も騰貴を累ねるに係らず意固地のやうに拋つて置かれる。噂では、持主の財團に遠大な計畫があつて見込みがつくまで棄てゝ置くのだといふ。それは兎に角、奈々子のやうな都會のこどもに取つてこの野原は、自然の祕密を善惡共に敎へられる大地の敎室であつた。

夏草の中の右手に煉瓦屋敷と呼ばれる赤い廢舍があり、突き當りに横一文字に外濠の土手が見える。それを越して都會の几帳面な又は奇怪な建物が組み合つて覗いてゐる。その上にぱふつと擴がつてゐる夏空の雲

の峰も、薔薇色に圖案化され、薄ら冷たい夕風が奈々子の汗ばんだ脇の下に一撫で感ぜられた。
煙つたやうな黑い瞳は何處か遠くを眺める儘にして、眼尻のやゝ下つた大きい眼瞼の肉の枠に幾分不與らしい皮肉な顫えを見せて奈々子は言つた。
「みんな、もう歸らない、夕方よ。」
「いやだ〳〵。」と濠の中の菱の葉の中を撹き廻つてゐるこども達は言つた。
「海老の子が隨分ゐるんだもの。」
「あたいだつて、歸りたかありやしないよ。でも……」
奈々子は忍草摺りの模樣の飛白に肩上げのある小さな左の肩をぐいと聳かした。だが、語氣はごく輕く、
「ぢや、あたいだけ歸らうかしら。」
と呟くやうに言つた。
男の子たちは、それを聞くと運命のやうに抵抗の力を拔いて、めい〳〵獲物を持つて岸へ上つて來た。
奈々子の不思議な牽引力に止むを得ず興を中斷して歸りの伴れとはなつたものゝ、まだ男の子たちに不平は殘つてゐた。
「知つてるよ、奈々公。蠟マツチ！」
「蠟マツチ、蠟マツチ！」
今まで昂然と男の子たちをリードして行つた奈々子は、これを聞くと急に身の竦むのを覺えた。蠟マツチとは何の理由も判らず自分を贔屓にして夕方になると屹度自分を待つてゐるあの西洋料理店の若主人龍彦のいつも持つてゐる持物なのである。男の子たちは誰に聞いてかそれを知つてゐるのだ。青紫色の丸い顏をして、胴體は細長く半透明で、中にシンの糸が骨のやうに透けて見える蠟マツチのことが頻りに奈々子の心に

考へられて來た。人魚といふものは、本當はあゝいふ形のものではあるまいか。そして、あゝいふ蠟マツチと同じやうに龍彦に愛される奈々子自身、人間の子ではないのぢやあるまいか。月もおぼろの夜に、生暖い風に誘はれて、うか〳〵南の海から匍ひ上り、つひ今の十文字と姓を呼ぶ家の娘になつてしまつた異類の素性——奈々子はそんな童話のやうな事を想ひ入つてゐた。その證據には、自分の性質といひ容貌といひ、何一つ親たちに肖てゐないし、わざとしない立居振舞でも不思議に人の眼につきたがる。そして人間以外の寵物に對するやうに人がちやほやして呉れるのは薄氣味の惡いほどだ。どうも自分は異類の子らしい——

奈々子は男の子たちの先を歩きながら考へ續けた。あの西洋料理店の若主人が煙草を喫ふとき磨る蠟マツチの焰の燐色に光る青白さに自分の身體が引込まれるやうな快い思ひをするのも妙だし、焰と同時にぷんと鼻を掠める硫黄の匂ひの死ぬほど好きなのも、人間に聞えては恥かしい變つた嗜好であるかも知れない。

奈々子は、いつか兩肩を落して、やゝ猫背になつて石の呉服橋を渡つてゐた。紫紺ちりめんの兵兒帶を猫ぢやらしにきつく胸高に締めて、その上胴の括れと腰の張りとの間に纖細い胴が誇らしげな嬌態を作つて、それがこの少女の後姿に蜂の女王のやうな甘い威容をいつも示してゐるのだが、思ひ入つて伸びを失つた今の奈々子の歩き方は、それをげつそり年寄り染みさしてしまつた。前へ廻つて眼を見たら相手に煙りつくやうな黑い瞳も、俄かに潤ひを失つてゐるに違ひない。奈々子は少女に似合はぬ複雜な表情の變化を持つてゐた。

「すこし、藥が利き過ぎたやうだ」と、男のこども達も少し悄げて、橋を渡るときには必ずやる、欄干の傳ひ歩きもせずに、眼鏡になつてゐる橋臺の間の半圓へ、上げ潮の黑い濠河水が瓦斯の泡を立てながらぐい〳〵吸ひ込まれて行くのを一寸覗いたり、西日が急に強く當つて、膚の赤剝げのやうに血の氣染みた日本銀行の建物に眼を眩しがつたりしながら焦れ〳〵してゐた。しかし流石に下町の子は氣轉を利かした。

「おい、みんなで、奈々つぺの好きな唄を唄つてやらうぢやねえか。」
「やらかせ、やらかせ。」

てんてつとん〳〵
てとんと餅米　いと櫻
助さん小間物賣らんすか
わたしもこれから出世して
大金持に、成駒屋。

町へ入ると、片側影はぐつと深くなつてゐた。始末のいゝ店は往來へ夕暮の水を撒いてゐた。男の子たちの唄ふ手毬唄は、行進曲のメロデーにもなつた。いつか一團の歩調は揃つて、先頭に立つ奈々子はもうすつかり機嫌の直つた隊長の位置にあつた。
「やあ、また、奈々子の行列だ。」
町並から覗くものもあつた。それで男の子たちも得意になつて聲を張り上げ、奈々子も自づと胸を張つて歩幅を伸した。
花柳街に普通の町家の混つてゐる數寄屋町の一郭を折れ曲ると、男の子たちはめい〳〵の家へ散つて行き、奈々子が自分の家の路地口へ草履を踏み入れたときは、蝙蝠が不規則にたそがれの薄闇を掬ひ交はしてゐた。
母より先に待受けてゐた橋風樓の女中が、玄關口へ首を出して言つた。
「晩いのね奈々ちやん、さあ、お湯屋〳〵。」

奈々子は橋風樓の女中お福とお民に連れ出されて、直ぐ近所のざくろ湯の暖簾をくゞつた。奈々子が嫌さうに筒袖の浴衣を脱ぎ捨て、下に纏つたものゝ紐を解き放つて、身體をぼんやり棒立ちにさしてゐると、素早くお民は手拭を奈々子の體に當てがつた。

「さあ、押へて〳〵。」

と言つた。

奈々子はお民が自分の體に當てがつて呉れた手拭に自分の小さい手を持ち代へながら、流石に幾分の恥を覺え、身體をくの字にして少し苦々しく見えるやう、氣取つて笑ふと、やつぱりこどもらしく眞中の厚い唇の隅の方が綻びて、溜つてゐた唾液が光ると一緒に小粒の齒並びがちらりと覗いた。

「どうしようねえ！　こんな可愛い子を！」

奈々子の身體を亂暴に搖すぶつて肩に頰を擦りつけながらお民が言つた。そのお民の背中をぱちやりと叩いてお福は叱つた。

「ばか、見當違ひの色氣を出すもんぢやないよ。見つともない。」

番臺のおかみさんが、くすりと笑つた。

濛々と湯氣の籠つた浴室の中に圓い艶消し硝子のホヤの瓦斯が點つてゐた。その光を受けて一番、生彩を放つてゐるのが男湯との界の仕切り戸に嵌つてゐる硝子繪だつた。三保の松原を背景にして床にいま眼覺めた島田髷の美人。兩國橋を見返して櫻の刺青を誇りかに腕捲りしてゐる横櫛の美人。およそ意味の無い畫題ではあるが、そのなまめかしく生々しい色彩に江戸末期の趣味の亂倫、安易な新鮮を求めてゐる退屈さが横

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

溢してゐた。

奈々子は身體を濕めす前に、先づその繪の前に立つて、時代の距りを子供心にも無意識に感じながら、しばらく眺め入るのが常であつた。

ざくろ口の面影をとゞめてゐる欄間に彫刻のある浴槽は可なり暗かつた。浴客の婦人は多くその浴槽の前に屯して三々五々、湯を使ひながら勝手なことを喋つてゐた。だが、話題は多く來春催される奠都三十年祭に就てだつた。

「ほんとに東京も、もう三十年になるのかね。」

「來年は大變なお祭りださうだよ。お揃衣の支度をした町内もあるとさ。」

「吉原の幇間は吉原雀の行列をすると決まつたさうだよ。」

「こつちも負けないでやり度いね。」

身體の嬌態や言葉遣ひからして、これ等の女たちは藝妓か料理屋の女中が大部分を占めてゐることが判る。

ときゞ〳〵浴槽中の女とからかひ合つて湯をばちや〳〵掛け合つたりしてゐる。

初めは氣がつかなかつたが、お福とお民が連れて來た少女が奈々子であるのが判つて來ると、これ等の商賣女のお喋りは一時しんと靜まり、それから囁き聲となつた。

「奈々ちやん、さあお遣ひなさいな。」

客が自分の專有として湯屋に預けて置く小判型の桶に新しい湯を汲んで持つて來る女も二三人あつた。お福とお民は得意になつて、奈々子に代り禮を言ひ、軈て、お禮に自分の方からも湯を汲んだ桶を持つて行つた。

奈々子はこれ等の女たちが自分に對して持つ無條件の好意と畏敬とを子供心にも感ぜずにはゐられなかつ

たが、それと同時に、まるでブリキ屑の塊のやうになつて棘々しく自分に對して惡意を示してゐる一團の女たちをも感ぜずにはゐられなかつた。それ等の女たちの首魁とも思はれる、おいろといふ老妓が聞えよがしに言つた。

「へえ、あんな、しよつぱ臭い素人の小娘に、河岸の笹屋の旦那も、七丘亭の若旦那も、へえ、こりや時世がどうかしてますねえ。」

錢湯でざつと化粧した歸りを橋風樓へ連れ込まれて、そこの女中部屋でお福、お民はじめ他の女中からも、寄つて蝟つて化粧の仕上げをされた奈々子は、全く繪に描いたやうな美少女となつた。豐な黑髮を、ませた洋風の朝卷と呼ばれる8字型に高く捻ぢ結んで、鼈甲の花頭の束髮簪で根元を押へた樣子は五つ六つも年嵩の娘のやうな物憎い妖艶さを添へた。

あつと言ふほど派手模樣の御所車を染めた縮緬の浴衣が、女中たちの費用の出し合ひで奈々子の爲に新調されてあつた。肌ぬぎの乳をぶらん〳〵垂らしながら奈々子に着附けをしてやる老女中。若い女中は張ち切れさうな體格をくり〳〵ひねりながら奈々子の帶の恰好をつけてゐる。

女中たちは、奈々子を、より引立たせる自分自分の工夫で時々喧嘩し合つた。しかし、女たちの心の底には狡い共通した奈々子に對する打算があるので、喧嘩も破裂にならずに、いゝ加減なところで折れ合つた。

橋風樓はこの花柳街で第一の老舗の料理店だつた。しかし近頃はめき〳〵賣出した同業の蘆花亭に押され氣味だつた。橋風樓が萬事に江戸前の格を守つて澄し返つてゐるに引代へ、蘆花亭は臨機應變、客受けさへよければ、どんなサービスもした。日清戰爭後に頓に擡頭した下町の商業區の新商店、新會社の連中客は、どうしても蘆花亭に取られ勝ちだつた。瘠せ我慢を言ひながらも橋風樓の店の寂びれは何とかしなくてはな

らなかつた。女中たちは覿面、貰ひものに影響があつた。

「素人娘を店の景氣付けの手助けに引つ張り込むなんて、惡口を言ふ奴があるかも知れないけれど、何も十二のお孃さんだ。それに、たゞ遊びに來て貰つて、お座敷へもお客樣になつて出て貰へばいゝのだ。何の後暗いことがあるものか。」

春の頃、奈々子が近所馴染から橋風樓へ偶然遊びに來て、それが客の目に止まると、あつちの座敷からも、こつちの座敷からも引張り凧になるほど人氣を沸かしたのが始めで、女中たちはこの考案を立てたのだ。そしてもうこの頃は、毎晩でも奈々子を迎へに行くやうになつてゐた。

奈々子は着附け中に、家に置いて來た菱の實を家の女中がうつかり捨てやしないかなどゝ思ひながら、白々とした氣持で女中たちの勝手にされてゐたが、結び終つた帶をぽんと叩かれて、「自分で見てご覽なさい」と鏡の前へ押し遣られて、ふと鏡の中の艶やかな美少女を見るとわれ知らず女の本能が湧いて、

「よし、誰がおいろ婆あなんかに負けるものか。」

眉を一つ動かしてみて、先づ自分の魅力の下調べをしてみるのであつた。ところへ、下足番が電話を取次いで來た。

「七丘亭の若旦那がね、奈々ちやんに珍しい洋食をご馳走するから、一遍あちらへいらつしやいつて、それから二人でまた、こゝへ遊びに來ませうつて。」

この時分に下町の町家の間に挾まつて七丘亭の三階建て洋館はまだ珍しかつた。まして表附きは南京羽目に框窓の普通の洋館建ではあつたが、裏側はナポリ風のバルコニーになつてゐて、ヴエランダの河梯子に畫

舫が繫いであるといふ變り方は珍しかつた。珍しいといふよりも、あんまり突飛に凝り過ぎてゐると言はれてゐた。この西洋料理店七丘亭は丁度、吳服橋と八重洲橋との中間ぐらゐの外濠に面した河岸に建てられてあつた。七丘亭といふ名が羅馬の七つの丘に因んでゐることから察しられる通り、こゝの主人丈吉は伊太利歸りの老コックだつた。初めは駐伊大使に連れられて渡つた料理方だつたが、大使の歸朝後も歐洲に居殘り、二十年近く稼ぎ溜めて金を持ち歸つて、この洋食店を開いたのが六年程前だつた。

二十年近い間、歐洲で何をしてゐたのか、どうして金を溜めたか噂さま〳〵であつた。

一國者ではあるが福々しい顏の老人で、派手な和服を着て、持歸つた外國品を取出しては家の中に並べ代へるのが道樂だつた。妻は貰はずに、甥の龍彥を店の跡取にするつもりか、さうでもないのか、兎に角、自分の店でぶら〳〵さしてゐる。主人が西洋生活の實地經驗者であり、その上、新しいものには同情と興味を持つので、この洋食店は商業街の青年紳士や賣出し前後の藝人の倶樂部になつてゐる。わけて近頃は仙孃といふ美人の新講談師に力を入れてゐるので兎角の評判をされてゐた。

お福に肩を抱えられ、相乘り人力車に乘つて橋風樓の門を出た奈々子は、數寄屋町と八重洲河岸とは眼と鼻の間で、眞直ぐに行つてしまつてはあんまり曲が無さ過ぎるといふので氣を利かした梶棒の若い衆は、反對の日本橋筋の大通りを一廻り車を走らせた。身輕ないでたちでちよい〳〵大通りを互ひ違ひに縫つて驅ける點燈夫は、街の瓦斯燈の底蓋を鉤の先で開けながら筒形の種火の棒で點火して行く。中橋の方はやゝひつそりとした夕闇に閉ぢられ、華やかで芝居染みた下町の夏の夜は日本橋の方へと開展するのであつた。錦繪店の濃爛な彩光。藥種屋の煮込んだやうな黑光りの陳列戶棚。往來へまで積み出されてゐる海苔問屋の荷箱の上で飯を終つた小僧たちが滿腹の後の前垂れを外ずして帶を締め直してゐる。鐵道馬車はちよつと途絕えて、やがて二つ續けて通り過ぎる。

「若し、晝間の男の子たちに見つかつたら。」
奈々子は車の上で、丹頂鶴のやうに華艶な自分の姿を自分で小さく抱き竦めるのであつた。
「そしたら、さぞ、嘆くだらう。」
口に出しては言はないが、男の子の友達は自分等の素朴な小女王を奪はれて、夜の大人の寵姫にされるのをどんなに嫌がつてゐることだらう。彼等はやつぱり妾を晝間通りに自分等で圍んで一緒に緣日へ行き度いのだ。さう思ふと、寂しい、濟まない氣がして奈々子は、彼等の一人にも會はないことを祈りながら俥を降りたくさへ思つてゐるうちに、もう、モザイク硝子の衝立が鉢植の芭蕉の葉を透して見える七丘亭の玄關に着いた。
龍彦は待ち受けてゐて、言つた。
「遲かつたぢやないか、何してたんだ。」
それでもにこ〳〵して奈々子の手を取つた。お福はぐづ〳〵言譯のやうな事を言ひながら自分で二人の下駄を下足箱にしまつて、振り向く途端に眼が壁へ向くと、あつと言つた。其處に女像のゴブラン織が掛けてあつた。
「なんてよく肖てるんだらう。この繪の女、奈々ちやんそつくり。氣味が惡いくらゐ。」
お福は不斷の酒で過敏になつてゐる瞼をぴく〳〵させながら、あらためて眺め入つた。
ゴブラン織の女は、幾分お凸額で下膨れ氣味の瓜實顏である。厚織のカーテンを背景にして胸のくゝれた部屋着のやうな着物をふくよかに裾廣に着て、すつくと立上つてゐる。見事な長身だ。そして微笑んでゐるのか涙をまぎらしてとぼけてゐるのか、見分けのつかない大きな、やゝ下り眼に、瞳を油煙の玉のやうに燻らしてゐる。その眼といひ、軟かく括つた厚味のある唇といひ、奈々子そつくりである。織物の豪華な縱横

の太い織糸の縞目に、視覺を操られ、それほど肖てもゐないものを、さう氣取らせるのではないかと、お福は眼をしばたゝきながら視點の距離を加減するため、背をのつたりそつたりして眺めてみたが、やつぱり肖てゐた。

「あたし、どうしやう。奈々ちやんが二人出來たわ。」

大げさな若い女の使ふやうな言葉遣ひで、中年近いお福は、そう言つて奈々子の背中をぱちや〳〵と叩いた。しかし實感の籠つてゐる聲音であつた。

「ほう、なるほど。」

龍彦は、この織物に始めて氣が附いたらしく言つた。

「叔父貴があつちから持つて來た寶物の一つさ。日にやけると色が褪めるといつて、却々出さないんだが、年に一二度は蟲干をするんだ。それで僕も知つてる模樣だが、奈々ちやんに肖てるとは氣が付かなかつた。こりや、お福の大發見だ。」

そう言つて手を伸して織物の女の顏の邊に浪打つ緩い皺を直さうとしたが、そこまでは手が屆かなかつた。それ程ゴブラン織は大きかつた。

「若旦那、西洋にもこんな女の子あるんでせうか。」

「いや、こりや西洋でも昔の繪の寫しで、昔話を描いたやうなものだが、何でも、これを描いた畫描きと、モデルに就いては餘程變つた話があるさうだ。精しくは叔父貴が知つてゐら。」

その時、漸く織物の女が何をしてゐるか詮索を始めたお福は、詰らなさうに言つた。

「若旦那、この畫の娘は物騷ですね。片一方に刀を持つて、片一方に男の生首を持つてるぢやありませんか。」

「そのわけが西洋の昔話にあるんだよ。確かヂユデイスとホロフエルメスと言つた。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com